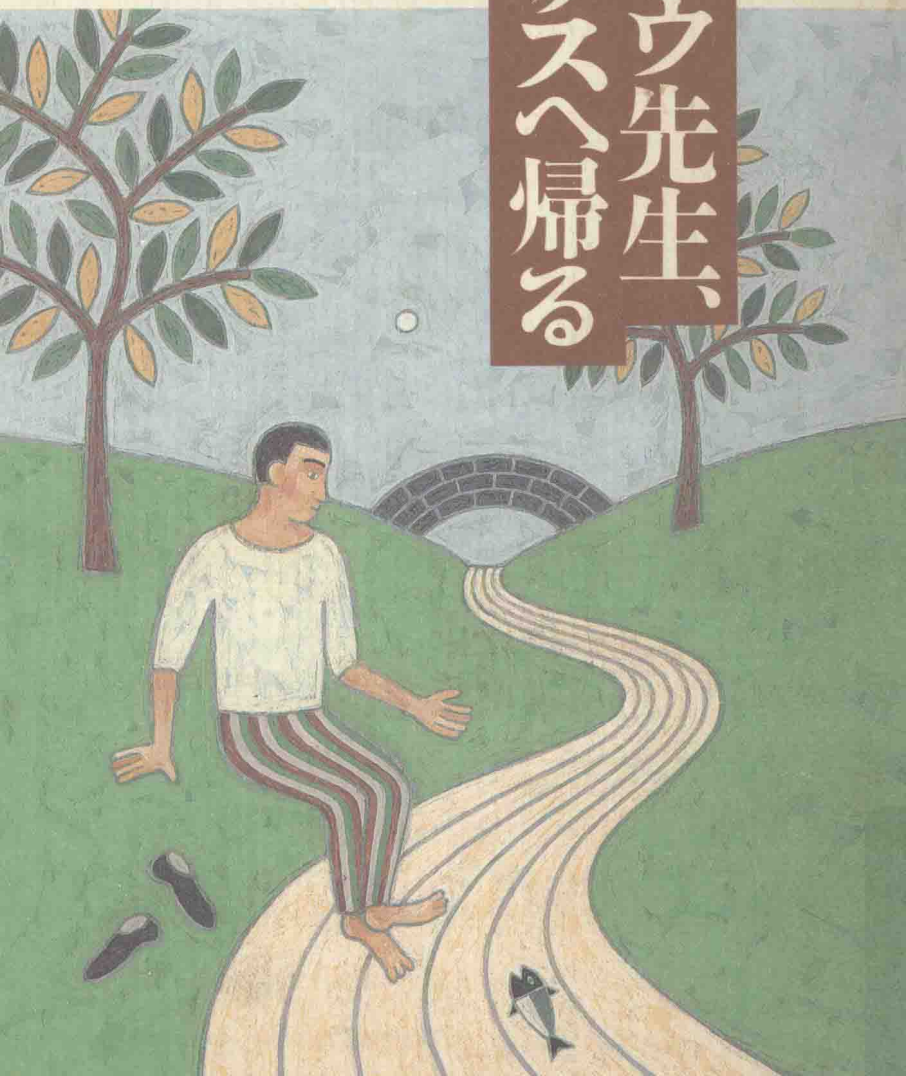


文藝春秋

林望

リンボウ先生  
イギリスへ帰る



リンボウ先生、  
イギリスへ帰る

林望

文藝春秋

著者略歴（はやし・のぞむ）

1949年、東京生まれ。慶応義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。日本書誌学・近世国文学専攻。84～85年、ケンブリッジ・オックスフォード両大学訪問研究員、86～87年、ケンブリッジ大学客員教授。現在、東京芸術大学音楽学部助教授。

英国滞在中の経験を綴った第一作『イギリスはおいしい』で91年日本エッセイストクラブ賞、92年『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総目録』で国際交流奨励賞、93年『林望のイギリス観察辞典』で講談社エッセイ賞の各賞を受賞。

リンボウ先生、イギリスへ帰る

1994年9月15日 第1刷

著者 林 望

発行者 堤 堯

発行所 株式会社文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町3-23

電話 03-3265-1211(代)

本文印刷 理想社

付物印刷 大日本印刷

製本所 矢嶋製本

\*定価はカバーに表示してあります。

\*落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替えいたします。小社営業部宛お送り下さい。

---

© Nozomu Hayashi 1994

Printed in Japan

ISBN4-16-349240-2

## Hullo!

リンボウ先生、イギリスへ帰る 目次

開け、ドア！	8
壁面鑑賞講座	17
医者ど患者	24
朝食における寛容の精神	39
ホテルの教訓	47
ハードボイルドの魂	54
橋と運河	65
ランドマーク	72

## Sayonara!

銀行のイギリス的流儀	80
ふた通りの親切	96
愛すべきシトロエン!	106
番号の利口と馬鹿	113
洗濯論	129
買物論	139
パフサインよ永遠なれ!	148
サヨナラ!	157

## Welcome back!

コンスタブルそしてトルブース……………	174
オペラの幻、幻のオペラ……………	191
叡知それとも死?……………	206
独断、ミュージカルを評す……………	220
椅子型コントラバス奇談……………	233
夢——書のしりえに附して……………	249

【装画】後藤薫

【装幀】目下潤一

【カバー字植印字】前田成明（帯・目次・本文刷も）

教へてよ、

まこどの愛は、そもいつくにかある。

方寸にか、舌頭にか、

はたまた誓ひ、いや、かねごとにか、

あるいは思慮にか、姿にか、

それども思案の外なる熱情にか。

世にありとある男たちの、連れ添ふ女たちの、その心の裡にか。

まこどの愛よ、いかんぞそなたは滅びずとや。

さればいざ、生きて我に教へてよ。

そなたは、そもいつくにをりて、

いかなれば、うつし世より追はれたるかど。

John Dowland “Tell Me True Love”より 一私訳

## Hullo!

リンボウ先生、イギリスへ帰る 目次

開け、ドア！	8
壁面鑑賞講座	17
医者ど患者	24
朝食における寛容の精神	39
ホテルの教訓	47
ハードボイルドの魂	54
橋と運河	65
ランドマーク	72

## Sayonara!

銀行のイギリス的流儀	80
ふた通りの親切	96
愛すべきシトロエン!	106
番号の利口と馬鹿	113
洗濯論	129
買物論	139
パフサインよ永遠なれ!	148
サヨナラ!	157

## Welcome back!

コンスタブルそしてトルブース……………	174
オペラの幻、幻のオペラ……………	191
叡知それとも死?……………	206
独断、ミュージカルを評す……………	220
椅子型コントラバス奇談……………	233
夢——書のしりえに附して……………	249

〔装画〕後藤薫

〔装幀〕日下潤一

〔カバー字植印字〕前田成明（帯・目次・本文刷も）

リンボウ先生、イギリスへ帰る



**Hullo!**

開け、ドア！

ドアの陰で待つ。おしなべて、パーティとか会食というものはそこから始まる。

招待客が所定の時刻に現れると、主人側は概ねその時刻には玄関のホールまたはその脇にあるレセプションルーム（応接間）のあたりで待ちかまえている、とそれが一般的な習わしである。

多くの場合、イギリスの家屋の玄関ドアにはガラスがはめこんであって、外から接近しつつある人影が、はっきりと分るようになってくる。

そうして、一番丁重な出迎へのしきたりでは、ホストはドアの陰に隠れるように待ち、客がドアのブザーを押すか押さないかのあわいに、さっとドアを開けて、その把っ手を握っていないほうの手を「迎え入れる」形にひろげ、「さ、どうぞ」と招じ入れる、とそういう次第になっている。

ところで、私は何度もイギリス人の主催するパーティやレセプションなどに招かれる機会があったが、その度に可笑しかったのは、その招待状に示された時間に、たいてい妙な「端数」が付いていることだった。

曰く「七時十五分」、曰く「六時十分前」、曰く……、どうして、こういう風に端数が付くのだろう。

いま、この意味を解説すれば、次のとおりである。

たとえば、「六時十分前」の場合、この十分前から六時までの十分間というものは、主人側が客を待ち受ける「待ち受け時間」に相当するのである。この間は、主人たるもの、いつでも客の到着に備えて、ドアまたはその近くに待機しなければならぬ。で、ブーツとブザーが鳴るその瞬間に、さっとドアを開ける、とこういききたいのである。すなわち、ほんとうに食事が始まるのは、この場合、「六時」であると解釈されるであろう。

同様に「七時十五分」ならば、実際のパーティまたは食事の開始時間は七時三十分と看做すべきであって、この間十五分が到着猶予待ち受け時間に当るのだ。そうして、早く到着した人は、その玄関脇のレセプションルームでソファかなにかに座って、なにくれとなくお喋りしながら、食前酒などを楽しみつつ、食事の開始を待つのである。

こういう招待客を招き入れる手順が、見ていると実にスマートであって、玄関で滞るとい

ような感じが皆無である。ところが、やってみるとわかるけれど、日本の家屋の玄関ではとてもこうスマートにはいかない。

それは何故か、ということにつき、これより少しく考察を巡らしてみたい。

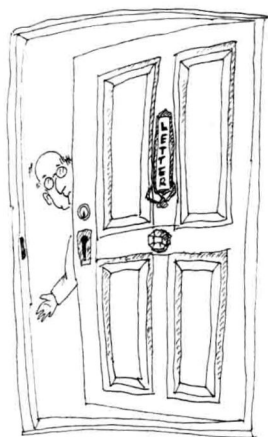
玄関が内側と外側とどっちに向いて開くか、そういうことを多くの日本人は意識しない。

しかし、事實は、この向きが日本とイギリス（ならびに西欧諸国）とでは反対になっているのである。

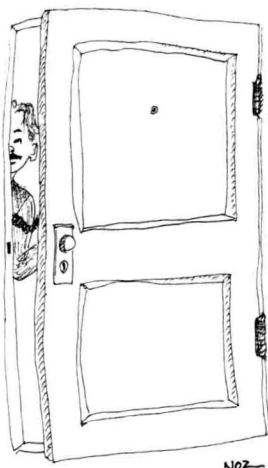
日本の玄関ドアは外に向って開く。これはほとんどの家でも例外がない。しかるに、イギリスの家屋では玄関のドアは決まって内側に向って開くのである。

これが、どっち向きに開くかということは、じっさい客人を迎え入れる上では極めて重要な意味を持っている。というのは、こういうことである。

まず日本式に外に向って戸が開く場合、客が戸のまん前に立っていたら、ドアにぶつかってしまつて、まともに開くことができなだらう。だから、客は、一步退いて戸の開くのを待つか、または少し横に避けて待機しなければならない。しかも、主人の側ではドアを向こう側に押しやるわけだから、それは心理的ベクトルとしては「向こうへ放つ」という傾きがあつて、「迎え入れる」という形にはなりにくい。そしてもし、主人がドアのノブを丁寧に握つたまま



英國式



日本式

11 開け、ドア!